

近世村絵図の「常水場」と水害の関係について

—GISを用いた過去と現在の地図の比較—

村上 晴 澄*

I. はじめに

1. 研究の目的

近世村絵図や古文書といった歴史史料には、過去の水害の記録が残されている場合がある。とりわけ絵図による記録は、現在の地形図との比較をはじめとする地理学的研究に有用である。近世までに作られた絵図から、過去の水害の復原を試みた研究は行われているものの、その数は少ない。伊藤¹⁾は、村落や河川などが描かれた古地図から洪水時の破堤箇所やその被害の復原を行った。また、水害に関する絵図を、平時の河川の管理に関する河川管理図、洪水の被害を示す災害図、村同士などの河川をめぐる紛争に関する水論図に分類した。木村²⁾は、近世絵図の中で水害に関する絵図に触れ、全体としては絵図の作成経緯に関することが中心としながらも、水害対策としての普請に着目している。河村³⁾は、近世の洪水に関わる絵図をもとに、地形なども考慮して破堤箇所や浸水範囲を復原し、堤や堰といった河川に設置された構造物の材料や強度と破堤場所との関係について考察している。いずれの研究においても、破

堤といった災害時の被害の検討に重点が置かれている。

一方、近世の絵図には、水害と対峙した人々の生活の結果として、その当時の土地の状態などの記載も残されている。本研究では、現在の京都府長岡京市神足地区の近世村絵図である「古市・神足村絵図」に描かれている「常水場」の記載に着目した。常水場とは、古市・神足村絵図に描かれている、いわゆる水つき場のことで、村絵図などに広く用いられる表現ではないと考えられる。その意味を明らかにするために、中世から現代にいたる水害の被害やリスクの地理的範囲をGISソフトを利用して重ね合わせ、近世村絵図に残された常水場とその周辺における土地利用の水害との関係を考察する。

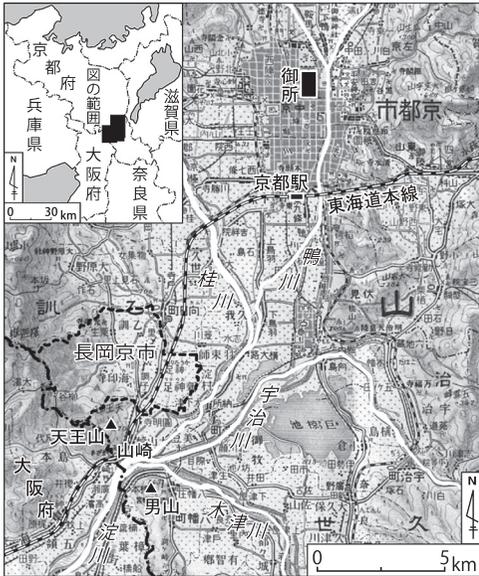
2. 地域概観

本研究の対象地域は、京都府長岡京市である。長岡京市の南側に位置する山崎付近で桂川・宇治川・木津川が合流し、淀川となって大阪方面へ流出しているため、京都盆地の水が集中する場所といえる(第1図)。そのため、長岡京市東部の平野部においても、かつては度々洪水が発生していた。長岡京市域に

* 立命館大学大学院文学研究科・院生

キーワード：水害、村絵図、地形図、GIS(地理情報システム)、ハザードマップ

Key words: Flood Disaster, Historical Illustrate Map, Topographical Maps, GIS, Hazard Maps



第1図 本研究の対象地域

注) 長岡京市の範囲は、現在の市域を示す。基図として、20万分の1地勢図「京都及び大阪」(大正8年測量、昭和7年部分)を使用。

は、小畑川や小泉川をはじめ桂川に合流する川が複数存在し、生活や農業にとって重要であった一方で、主に桂川に近く標高が低い東部において、水害が生じていた。

長岡京市を含む乙訓地域には、784年に長岡京が造営された。その長岡京も水害に遭っていたことが「日本紀略」⁴⁾に記録されており、長岡京がわずか10年で廃都になった原因として洪水説も存在する⁵⁾。洪水による廃都が事実かどうかは不明であるものの、この地域が水害に遭いやすい土地であったことが示唆される。長岡京廃都後は、ほとんどが農村地帯であり、平安京／京都の近郊農村としての役割を担った。その一方で、平安京から山陽方面へ向かう際に通過する交通の要衝という性格も持ち、中世には勝龍寺城をはじめ多数の城が築かれた。

近代に入り、とりわけ昭和初期以降は、京

都や大阪という大都市に近いという立地特性上、近郊住宅地や工場地域としての開発も始まった。特に昭和初期の私鉄(現・阪急電鉄)の開業や神足駅(現:JR長岡京駅)の開設による鉄道網の充実、本格的な自動車道路である現在の国道171号線の開通が大きな影響を与えたと考えられる。その後、高度経済成長期以降は、京都や大阪の近郊住宅地としての開発が顕著になった。そして、主に平野部に位置していた農村の大部分は住宅地や工場地域へと変化した。丘陵地においても宅地開発が行われ、現在のような市街地を中心とする景観を形成するに至った。

本研究で取り上げる地区は、現在の長岡京市東部の神足地区である。基本的に近世の古市村・神足村・勝龍寺村の範囲で、現在も多少は水田や畑地が残っているものの、戦後に作られた住宅地や工場地域が主たる土地利用を構成している。

II. 史・資料の概要と研究方法

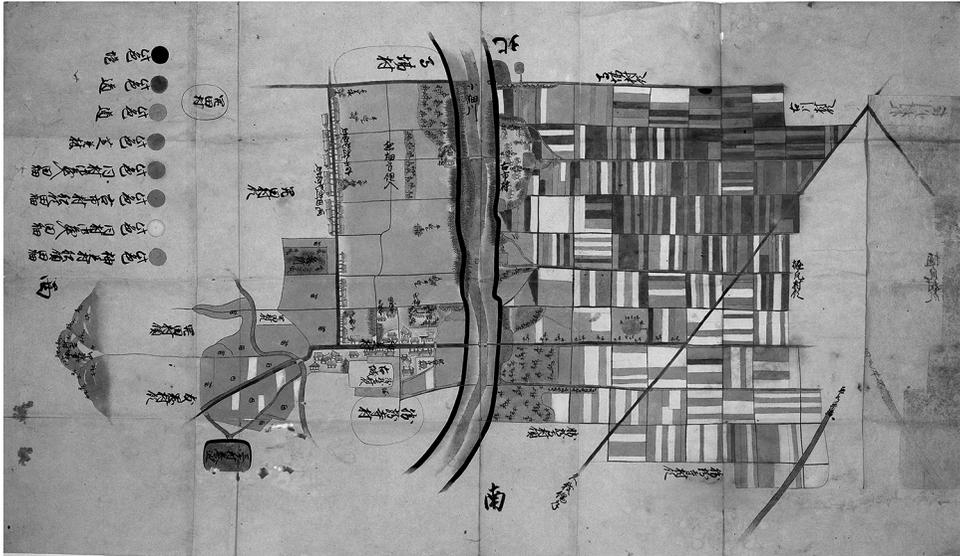
使用する主な史・資料は、近世の村絵図や古文書、近代の写真といった史料と地形図、ハザードマップ、現在の道路・建物などの土地利用や標高を示すGISデータである。

主要史料となる村絵図は、「古市・神足村絵図」である(第2図)。この絵図は江戸時代中期に、当時の古市村と神足村の複雑に入り組む村域を示すために作られたものであるとされている⁶⁾。近代以降の測量に基づいた地形図と比べると精度が劣るものの、地形図と重ね合わせて考察するに十分な精度であり、その張り紙に常水場が描かれている常水場(第3図)は、村の悩みである水はけの悪さを示

す記述であり、少なくとも近世には水問題が深刻であったと考えられている⁷⁾。

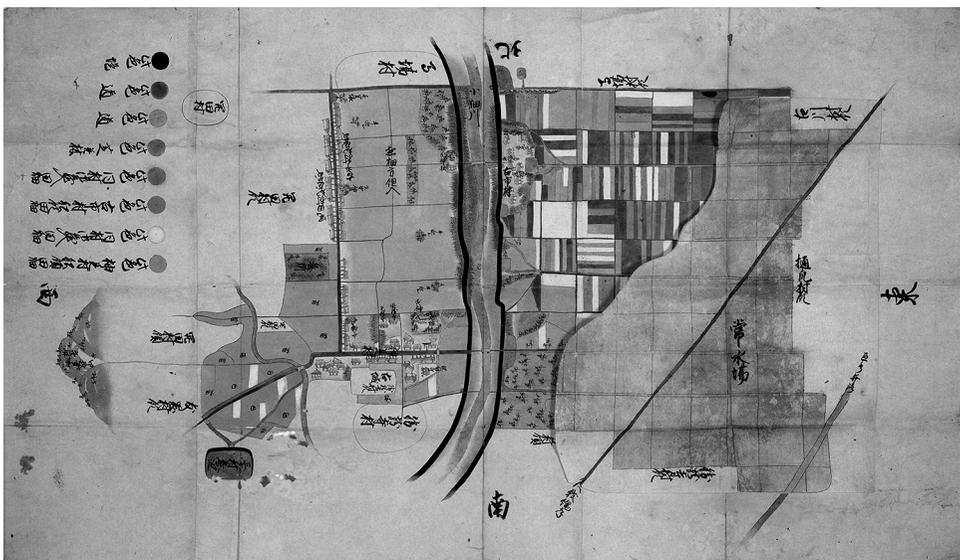
古文書は、水害との関連が深い近世初期の勝龍寺城移築に関わる文書を、地形図は、近

代以降の測量に基づいた最も古い地形図である、明治20年頃に作成された仮製2万分の1地形図を、ハザードマップは、長岡京市で各家庭に配布されている「長岡京市防災ハザー



第2図 古市・神足村絵図（古市区有文書）

注）長岡京市教育委員会提供。



第3図 古市・神足村絵図貼紙（古市区有文書）

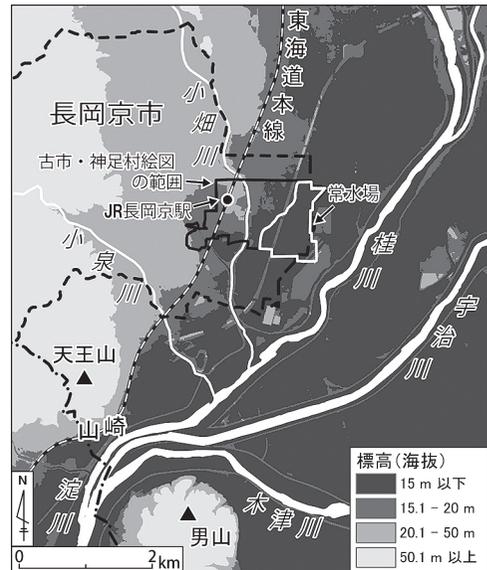
注）長岡京市教育委員会提供。

ドマップ（平成 22 年版）」を用いる。

過去の被害被災地の範囲や浸水水位を復原することは難しいが、本研究では、これらの史・資料と GIS データを GIS ソフト上でオーバーレイし、近世村絵図の内容や被害被災地点や、現在のハザードマップの浸水想定域を比較することにより、過去と現在の被害面での関係を検討する。GIS ソフトを用いることにより、縮尺の異なる地図を同縮尺で表示し、オーバーレイすることが可能である。その上、村絵図のように現在の地形図に比べて歪みが大きく、そのままオーバーレイするとずれが生じる地図であっても、GIS ソフト上で多少は歪みを修正することができる。そのため、GIS ソフトを用いることにより、紙媒体の地図では重ね合わせて比較することが難しい複数の地図を容易に比較することが可能である。本研究で用いる GIS ソフトは、ESRI 社の Arc Map10 である。

III. 絵図をもとにした浸水想定

前章で紹介した「古市・神足村絵図」および常水場のポリゴン（面）データを GIS ソフト上で作成し、現在の標高データとオーバーレイしたものが第 4 図である。常水場部分は標高 15m 未満であり、常水場およびその周辺は凹地となっていて、桂川や小畑川などから溢れた水が滞水しやすいことがよくわかる。常水場部分を含む現在の長岡京市東部地域および周辺は、土地が相対的に低く洪水時に容易に浸水し、長期にわたって滞水する後背湿地であるとされており⁸⁾、常水場は後背湿地に対応すると考えることができる。このことから、常水場ができる原因は、水が溜

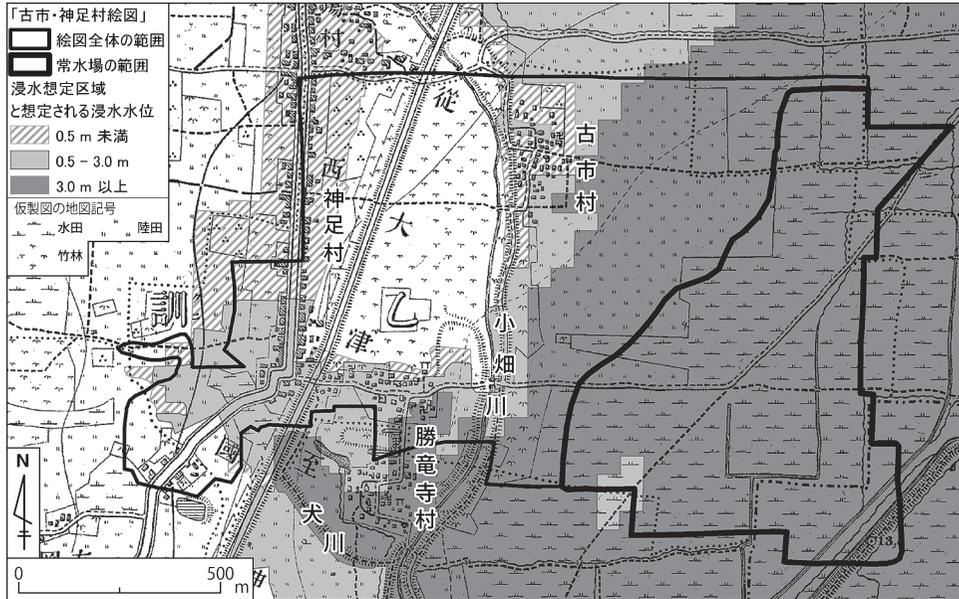


第 4 図 常水場および周辺の現在の標高

注) 標高は、国土地理院基盤地図情報 5m メッシュを使用。河川・鉄道等は、同じく基盤地図情報 25000 をもとに、筆者作成。

まりやすい地形と深く関連しているといえる。そもそも、長岡京市東部地域が頻繁に被害に遭っていた原因として、この地域が京都盆地南部に位置し、京都盆地を流れる河川が最終的に合流する山崎に近く、標高が低いことが挙げられる。

次に、「古市・神足村絵図」と明治 20 年代に作成された仮製 2 万分の 1 地形図を比較すると、絵図の範囲の田の記号が 2 種類存在することがわかる（第 5 図）。これは、「陸田」と「水田」であり、陸田（乾田）は冬季に水が涸れて歩ける田、水田（田）は蓮田・藺田（い草）を含む四季を通じて水のある田であるとされている⁹⁾。そこで、GIS ソフト上で「古市・神足村絵図」の常水場のポリゴンデータを作成し、仮製図とオーバーレイすると、常水場と仮製図の「水田」記号の部分がおおよそ一致する（第 5 図）。常水場は、水田ではな



第5図 古市・神足村絵図と仮製図の比較

注) 基図として、仮製2万分の1地形図「伏見」(明治22年測量、同30年修正)を使用。浸水想定は、長岡京市 防災・危機管理担当作成「長岡京市防災ハザードマップ(平成22年度版)」をもとに筆者作成。

く雨水や洪水による水つき場を指すと考えられるが、水田と一致することから、水がたまりやすいところを水田として利用していたと考えられる。このことから、近世の常水場は近代の地形図からも土地利用の違いとして確認でき、近代以降も常水場の性格をもっていた可能性がある。

絵図の右下に描かれている2本の斜めの線のうち、向って左側が後述する久我縄手¹⁰⁾、その右側に悪水井路として描かれているのが五間堀川である(第2・3図)。この川のすぐ東に並行して作られたのが羽東師川であり、両川ともこの地域に溜まる水を排水するために人の手によって作られた水路である。羽東師川は、排水をよくするため、小畑川に合流させるのではなく小畑川や小泉川をくぐり桂川へ直接合流させていることが特徴である(第6図)。その開削時期は近世末の文化・文

政年間(1804～1829年)とされている¹¹⁾。現在は桂川の改修により末端部の流路が改変されている。このような川が必要であった要因は、水はけの悪さを解消するためであり、先述したように常水場が後背湿地¹²⁾であったためと考えられる。

また、中世の軍記物語である「太平記」¹³⁾には、久我縄手が泥沼化しやすかったことがわかる記述があり、馬の足も立たないほどぬかるんだ道であると書かれている。久我縄手は平安京造営の際に、平安京から直線に南下する鳥羽作り道から山崎へ至るために作られた道であった(第6図)。久我縄手が泥沼化していたことは、久我縄手が常水場を通過することからも深い関連性が考えられる。該当部分を引用する。



第6図 羽束師川の流路

注) 基図として、仮製2万分の1地形図の以下の図幅を用いた。「杓掛村」(明治24年測量)、「山崎村」(明治25年測量)、「伏見」(明治22年測量、同30年修正)、「淀」(明治22年測量、同30年修正)

「卷第八 禁裡仙洞御修法事付 山崎合戦の事 (1333年3月15日)」¹⁴⁾

(前略) (洛中から) 山崎へとぞ向ひける。
(中略) 久我暇は、路細く、深田なれば馬のかげ引きも自在なるまじとて、(後略)

「卷第九 山崎攻事付 久我暇合戦の事 (1333年4月27日)」¹⁵⁾

さしも深き久我暇の、馬の足も立たぬ泥土の中へ馬を打入れ、我先にとぞ進みける。

以上のように、中世の久我暇手は道幅も細く、馬の通行に支障をきたすような泥道であったことがよくわかる。これらの記述が約8kmにおよぶ久我暇手のどの部分を指すのか、あるいは全体を指すのか不明であり、季

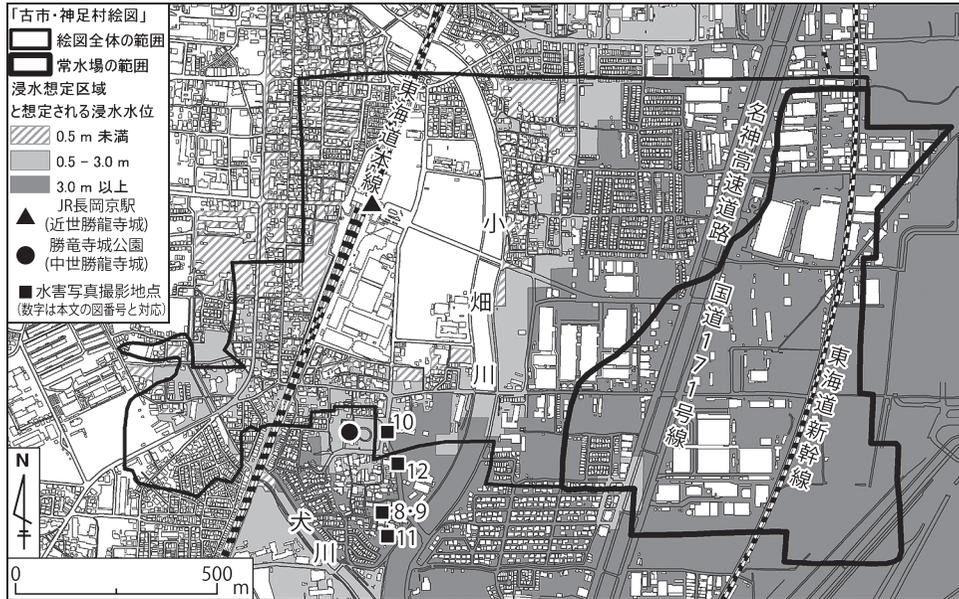
節や天候によって状況は変化すると考えられるものの、「深田」「馬の足も立たぬ泥土」といった記述は、近世の常水場の状況が中世にも存在した可能性を示唆している。

ここで、長岡京市 防災・危機管理担当作成の「長岡京市防災ハザードマップ(平成22年版)」(以下、ハザードマップ)を用いて、古市・神足村絵図の範囲の水害の危険性をみる。ハザードマップに載せられている桂川及び小畑川などから水が溢れた際の最大の浸水予想範囲と水位のGISデータを作成し、絵図のポリゴンデータとオーバーレイした(第5図)。第5図から、長岡京市東部のかつての常水場およびその周辺は、小畑川と犬川の合流地点北側に位置する勝竜寺付近とともに浸水水位が軒上浸水の3m以上と想定され、現在でも大規模な水害に遭うリスクのある土地と理解できる。

IV. 史料から判明する過去の水害

1. 洪水と勝龍寺城の移築

勝龍寺村は、中世勝龍寺城を含む小畑川と犬川の合流地点北側に位置し(第7図)、近代以降も度々水害を被っている¹⁶⁾。近世初期の寛永10(1633)年、中世勝龍寺城が水害に見舞われた。この年、国替えにより上方へ転封となり、勝龍寺などに領地を与えられた永井直清は、中世に築城された中世勝龍寺城を整備して入城することにした。しかし、大雨による洪水で城が浸水したため、「古城(中世勝龍寺城)より北、望の所」に新たに城を構える許可を幕府に願い出て、許可が出ている¹⁷⁾。この時、幕府から直清へ宛てた書状の一部を引用する¹⁸⁾。



第7図 常水場および周辺の浸水想定区域と水位

注) 基図として、国土地理院 基盤地図情報 2500 を使用。浸水想定は、長岡京市 防災・危機管理担当作成「長岡京市防災ハザードマップ (平成 22 年度版)」をもとに筆者作成。

則絵図之通、從古城北望之所屋敷取可仕之
 旨被 仰出候間、可被得其意候、恐々謹言、
 (江戸幕府老中連署奉書)

仍先日ハ近郷殊之外大水出、其元もひきか
 ね申候由、近年これなき水候由、及承候事、
 (老中酒井忠勝書状)

以上の内容から、洪水の規模は減多にない
 ほど大規模であったことが判明する。この時
 のような大洪水は珍しかったことがわかると
 共に、ある程度の洪水は珍しくなかったと解
 釈することも可能である。この「望の所」に
 建設した勝龍寺城 (以下、近世勝龍寺城) は、
 現在、勝竜寺城公園として整備されている中
 世勝龍寺城跡の約 600 m 北方に位置する、現
 在の JR 長岡京駅東口付近に本丸が建設され

たと考えられている¹⁹⁾ (第 7 図)。その後、
 永井直清は慶安 2 (1649) 年に摂津国の高槻へ
 転封となり、近世勝龍寺城は現存しない。近
 世初期において、近世勝龍寺城付近が水害に
 遭わない場所であったかどうか不明であるも
 のの、第 4 図を見ると、近世勝龍寺城が位置
 した小畑川右岸、現在の JR 長岡京駅付近は、
 小畑川左岸の常水場付近よりも標高が高く、
 段丘状であることが分かる。また、明治時代
 の仮製 2 万分の 1 地形図を見ると、西国街道
 沿いより東側の近世勝龍寺城付近には、竹林
 が広がっていることがわかり、水利が悪く耕
 作できないところ、逆に考えると水害に遭い
 にくいところが竹林となっていた可能性も
 考えられる (第 5 図)。その上、現在のハザード
 マップでは、JR 長岡京駅東口付近は浸水想
 定区域に入っていないことから、近世におい

でも水害に遭いにくかった可能性が高い。この理由は、近世の勝龍寺城や JR 長岡京駅関連の工事により標高が高くなった可能性があるものの、段丘地形であり標高が高く、水害に遭いにくいためと考えられる。以上のことから、当時の小畑川の川床の高さをはじめ不明な点も多い一方で、近世初期以降に地形が大きく変化していないのであれば、水害を避けるために近世勝龍寺城を築城した意義を見出すことができる。

2. 写真から見る水害

長岡京市東部地域が過去に水害に遭って



第 8 図 水没した春日神社 (1935 年)

『昭和 10 年水害写真帳』(出典：長岡京市教育委員会編『勝龍寺村今むかし』、長岡京市教育委員会、2009 年、18-19 頁。)



第 9 図 「第 8 図」と同一地点の現況 (2012 年)
(筆者撮影)

たことは、前節までの事例から明らかであり、実際には近代にも水害に見舞われていた²⁰⁾。しかし、近世までの水害は地図や写真といった視覚資料としては残っていない。そこで、昭和初期から同 30 年頃にかけての勝龍寺地区の水害時の写真から、実際の被害状況の一端を見る。写真の撮影場所は、第 6 図に示したとおりであり、現在のハザードマップにおいても 3m 以上の浸水が想定されている場所である。

はじめに春日神社の写真を見ると、鳥居が水没し、近くを舟で移動している様子を見て



第 10 図 水害後の復旧作業の様子 (1935 年)

『昭和 10 年水害写真帳』(出典：長岡京市教育委員会編『勝龍寺村今むかし』、長岡京市教育委員会、2009 年、18-19 頁。)



第 11 図 台風 13 号による被害 (1953 年)

『前田照男氏撮影写真』(出典：長岡京市教育委員会編『勝龍寺村今むかし』、長岡京市教育委員会、2009 年、18-19 頁。)



第12図 舟で移動する子どもたち（1959年）
「須田晃弘氏所蔵写真」（出典：長岡京市教育委員会編『勝竜寺村今むかし』、長岡京市教育委員会、2009年、18-19頁。）

取れる（第8図）。現在の写真（第9図）と比較すると、鳥居の高さと人の身長から、浸水水位が人の背丈よりも高いことがよくわかる。第8図に見られる浸水状況は、ハザードマップでは勝竜寺地区が桂川の洪水により3m以上の浸水が想定されていることから理解でき、現在でも同じような水害が発生する可能性があるといえる。第10図は、中世勝龍寺城の堀跡付近で水害後の復旧作業を行う人々の写真である。この写真は、城跡の東側で南方を向いて撮影したものであり、写真右に堀跡が写っている。昭和初期の写真であるものの、本章第1節で取り上げた中世の勝龍寺城が浸水した話と関係する史料である。そのほかに、家屋周辺が広範囲に浸水している様子（第11図）や、水没した道路を船で移動している様子（第12図）がわかり、これらの写真から相当な被害を被っていたことが判明する。

本節で取り上げた写真のうち、春日神社の鳥居は当時の状態で現存しており、過去の水害の実態を伝える貴重な遺産である。また、今回用いた写真はいずれも勝竜寺地区のもの

であるが、第Ⅲ章で用いた「古市・神足村絵図」の範囲で撮影された水害写真はほかにも残されており、撮影場所や浸水水位などを検討する必要があるといえる。

V. おわりに

本研究では、「古市・神足村絵図」に描かれた常水場および周辺の過去の水害や土地利用について、地図を用いた比較を通して考察した。その結果、常水場は土地が低く水が溜りやすい場所であるため、いつの時代においても水害に遭いやすく、かつては水田を中心とした土地利用であったことが判明した。

太平記に書かれた久我縄手通行時の様子から、近世の常水場の状況が中世の1300年代にまで遡る可能性があることがわかった。少なくとも近世初期には、常水場に近い中世勝龍寺城が大規模な洪水に見舞われていたことから、常水場付近が水害に遭いやすいという状況は、近世初期には遡るといえる。昭和初期から同30年代にかけての水害時の写真から2m程度も浸水していた事実がわかり、さらに、現在のハザードマップで最大3m程の浸水が想定されていることから、常水場付近が現在も水害に遭いやすいという状態は一貫している。

常水場と標高データのオーバーレイにより、常水場は周囲よりも相対的に土地が低い後背湿地であることが明らかである。さらに仮製2万分の1地形図とのオーバーレイにより、常水場付近が近代においても水田記号の違い、つまり土地利用の違いとして残っていることに加え、常水場付近の土地利用がほかと異なることが判明した。さらに、水害を避

けるために築城された近世勝龍寺城付近は竹林であり、水利が悪く耕作できない一方で水害に遭いにくい場所であった可能性も見い出せた。そして、現在のハザードマップでは中世勝龍寺城付近は桂川の洪水により3m以上の浸水が想定されているが、近世勝龍寺城(現・JR 長岡京駅)付近はほとんど浸水しないという興味深い事実も明らかとなった。また、常水場付近は、五間堀川や羽束師川という悪水抜き水路を掘る必要があるほど排水不良が深刻であったこともわかった。

また、絵図に描かれた常水場の範囲は当時の古市・神足両村内のみであるものの、常水場の外側も東部から南部にかけては標高が低いところが広がっており、そのようなところは、かつて常水場であった可能性が高い。絵図が作成された近世当時の土地利用は水田を中心とする耕地であったため、たとえ浸水しても、水位が低く短時間で水が引く場合や、作付けしていない季節であれば大きな被害は発生しなかった可能性もある。しかし、現在のように住宅や工場が多数存在する状況では、浸水するとすぐに人的・物的被害へとつながる。このように、近代以降は治水設備が整備された一方で、もしも水害が発生した場合には、過去よりも大きな被害が発生するリスクも高くなっていると考えられる。

ここで改めて第7図をみると、常水場の範囲はハザードマップの浸水想定水位が高い範囲とおおよそ一致することがわかる。それにも関わらず、現在では住宅や工場が立ち並んでいる上、国道をはじめとする重要な交通路が通っているため、第4章第2節で確認した春日神社の鳥居が水没した時のような大規模な水害が今後発生すると、当時の集落が被っ

た被害より大きな被害が発生することが明らかである。また、住宅や工場に限らず、国道をはじめとする交通網への大きな被害も考えられる。

以上のように、紙媒体の村絵図やハザードマップなどをGISソフト上でオーバーレイすることにより、同じ場所の過去と現在の景観を比較でき、現在の標高や建物といった情報を付加することで、過去と現在の水害リスクの関係を容易に確認できる。そのため、村絵図などの歴史史料から過去の水害の状況を知り、今後の防災について検討する大きな意義が見い出される。本研究では、自然地形や土地条件、各時代における治水設備の整備とその防災効果など十分に検討できなかったことも多く、今後、過去の水害や現在の防災を考える上での課題である。

〔付記〕本稿は、2011年度に立命館大学大学院文学研究科において開講された「地理学・フィールドリサーチⅠ・Ⅱ」で作成したレポートを大幅に修正したものです。矢野桂司先生、中谷友樹先生には、授業ならびにレポート作成にあたり御指導頂きました。また、長岡京市教育委員会の百瀬ちどり氏には、歴史資料に関して多くの助言を頂きました。記して謝意を申し上げます。

注

- 1) 伊藤安男「古地図よりみた輪中災害」、歴史地理学紀要21、1979、85-102頁。
- 2) 木村東一郎『村図の歴史地理学』、日本学術通信社、1979、109-122頁。
- 3) 河村克典「近世佐波川下流域における洪水一絵図の分析を通して」、地図41-1、2003、14-25頁。
- 4) 「日本紀略」(延暦十一年八月九日)に、「大雨洪水。同十一日 幸赤目崎(紀伊郡)。覧洪水。同十二日 遣使賑贖百姓。遇水害也。」と書かれている(国史大系編修会『日本紀略 第二(前編下)』、吉川弘文館、1980、266頁)。
- 5) 小林 清『長岡京の新研究 全』、比叡書房、

- 1975、37-42頁。
- 6) 井ヶ田良治「水害に悩む村々」、(長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史 本文編二』、長岡京市役所、1997、所収)、243-249頁。
- 7) 前掲6) 243-249頁。
- 8) 日下雅義「都市化の進展と水害—桂川右岸の場合—」、立命館文学 252、1966、494-495頁。
- 9) ほかに仮製図の地図記号には、深田(沼田)と呼ばれる泥が深く、ひざまでぬかる、あるいは田船で耕作するような田があるが、この地域には存在しない。日本地図センター『地図記号のうつりかわり—地形図図式・記号の変遷—』、日本地図センター、1994、136頁。
- 10) 足利健亮『日本古代地理研究』、大明堂、1985、475頁。144-161頁。
- 11) 京都府『京都府史跡名勝天然記念物調査報告(第十三冊)』、京都府、1932、26-48頁。
- 12) 前掲8)、494-495頁。
- 13) 太平記は、鎌倉幕府滅亡から室町幕府成立の頃までを書いた軍記物語であり、作者や成立時期などの詳細は不明である。
- 14) 後藤丹治・釜田喜三郎校注『岩波古典文学大系 34 太平記 一』、岩波書店、1960、253-256頁。
- 15) 前掲14)、282-285頁。
- 16) 長岡京市教育委員会「勝竜寺村今むかし」、長岡京市教育委員会、2009、18-19頁。
- 17) 井ヶ田良治「永井直清の勝竜寺領知」、(長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史 本文編二』、長岡京市役所、1997、所収)、30-32頁。
- 18) 田中淳一郎「永井家文書」、(長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史 資料編二』、長岡京市役所、1992、所収)、682頁。
- 19) 長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 4』、長岡京市埋蔵文化財センター、1989、4-18頁。
- 20) 植村善博『京都の治水と昭和の大水害』、文理閣、2011、73-82頁。